

20世紀、新たな映像文化を花開かせた映画界の
名優チャールズ・チャップリン。
ロンドンで苦境にあった貧しい少年時代が、
アメリカで一躍スターとなったチャップリンの
人生の原点でもありました。
スクリーンを通して彼が伝えたいと強く願ったのは、
貧しくても人間性を失わないヒューマンな心、
つまり、自由と希望と愛そのものでした。
思わず笑いを誘う喜劇の背景には、
そんな人間性へのあたたかなまなざしとともに、
自由を奪い去ろうとする権力や物質社会への
鋭い批判精神も宿っていたのです。
世界が戦争の暗雲に脅かされていく中で、
彼は熱い思いを込めて語りかけました。
その思いに、21世紀を生きるあなたは、
どうかたえますか。

Dear. Charles Chaplin



スクリーンの中から
自由と希望、そして愛を語った

チャールズ・チャップリンへ 手紙を書こう

CHARLES CHAPLIN TM
©Roy Export Company Establishment 2006 Licensed by Copyrights Group

第7回(2006年度)高校生エッセー・コンテスト募集要項

1 手紙形式のエッセー募集

チャールズ・チャップリンが、映画「独裁者」の中で語りかけるメッセージに、あなたはどうかたえますか。感じたことや考えたことを、チャップリンへの手紙という形式で、自由に書いてみてください。

2 応募資格

高校生(国籍・学年・性別は問いません)

3 応募方法

日本語の場合は、1200字(A4判用紙、横書き、ワープロ・手書きいずれも可)程度。英語の場合は、400 words(A4判用紙)程度。

※別紙(A4判用紙)に、氏名(フリガナ)・性別・高校名(所在県名)・学年・自宅郵便番号・住所・電話番号を記入して、表紙として原稿に添付し、郵送してください。

4 募集期間

2006年7月10日(月)~9月4日(月)(消印有効)

5 賞金等

最優秀賞1名(賞金5万円を贈呈。10月1日(日)津田塾大学において表彰します。)優秀賞若干名(賞金1万円を贈呈)

最優秀作品は津田塾大学広報紙 Tsuda Today と津田塾大学ホームページに、優秀作品は津田塾大学ホームページに掲載・公表します。応募作品は返却しません。応募作品の著作権は主催者に帰属します。

6 入選発表

9月29日(金)までに、入選者本人に通知します。
(津田塾大学ホームページには10月1日以降掲載します。)

7 提出先・問い合わせ先

〒187-8577 東京都小平市津田町2-1-1
津田塾大学「高校生エッセー・コンテスト係」
TEL042-342-5113 E-mail: essaycon@tsuda.ac.jp



You are not machines!
You are not cattle! You are men!
You have the love of humanity in your hearts.
You don't hate—only the unloved hate.

(映画「独裁者」より)

1940年に封切られたチャップリンの『独裁者』(原題: *The Great Dictator*)。ナチス・ドイツはその前年ポーランド侵攻を開始、第二次世界大戦が始まりました。やがて戦火は世界の各地に広がる一方、ナチスによるユダヤ人の虐殺、迫害が猛威を振ります。この映画の主人公は独裁者ヒンケルとうり二つのユダヤ人の床屋(チャップリンの二役)。ヒンケルと間違えられた床屋は、最初、身を守るため必死に独裁者を演じますが、ついに我慢できなくなって本音を語り始めます。

I'm sorry, but I don't want to be an emperor. That's not my business. I don't want to rule or conquer anyone. I should like to help everyone—if possible—Jew, Gentile, black men, white.

We all want to help one another. Human beings are like that. We want to live by each other's happiness—not by each other's misery. We don't want to hate or despise one another.

Gentileというのはユダヤ人から見た異教徒、とくにキリスト教徒のことです。床屋は、自分は人を支配したくはない、宗教・人種を問わず、すべての人々を助けたい、それが人間の本来の姿だ、と演説を始めます。さらに彼は、文明が発展したために人間が強欲になり、人間らしさを失ったことを指摘、機械よりも人間性を、賢さよりもやさしさをと訴えて、現代の物質文明に対して警鐘を鳴らします。

The way of life can be free and beautiful, but we have lost the way. Greed has poisoned men's souls.... Machinery that gives abundance has left us in want. Our knowledge has made us cynical; our cleverness, hard and unkind. We think too much and feel too little. More than machinery, we need humanity. More than cleverness, we need kindness and gentleness. Without these qualities, life will be violent and all will be lost.

ある民族が他の民族を支配し征服しようとするような悲惨な事態をもたらしたのは、人間の進歩を信じようとしぬ人々だ、と床屋は言います。ヒンケルの兵士に向かっても、彼は「機械になってはいけない、あなたたちの心には人間らしい愛があるはずだ。憎んではいけない、愛されていないものだけが憎むのだ。」と呼びかけます。

彼はユーモアの中に熱い思いを込めて語りかけました。

その思いに、21世紀を生きるあなたは、

どこをたえますか。

CHARLES CHAPLIN™
© Roy Export Company Establishment 2006
Licensed by ©copyrights Group



To those who can hear me, I say "Do not despair." The misery that is now upon us is but the passing of greed, the bitterness of men who fear the way of human progress. The hate of men will pass, and dictators die, and the power they took from the people will return to the people....

Soldiers! Don't give yourselves to brutes—men who despise you and enslave you, who regiment your lives, tell you what to do, what to think and what to feel, who drill you, diet you, treat you like cattle....

Don't give yourselves to these unnatural men, machine men with machine minds and machine hearts! You are not machines! You are not cattle! You are men! You have the love of humanity in your hearts. You don't hate—only the unloved hate.

床屋は最後にヒンケルの迫害を逃れて外国にいる恋人ハナに呼びかけ、明るい未来が近づいている予感を伝えます。じつはハナはチャップリンの最愛の母の名でした。苦しい生活の中でチャップリンを育て、ついに心を病んでしまった母親への愛情と感謝の気持ちを、チャップリンはこの作品で表現していたのです。

Hannah, can you hear me? Wherever you are, look up, Hannah! The clouds are lifting! The sun is breaking through! We are coming out of the darkness into the light. We are coming into a new world—a kindlier world where men will rise above their hate, their greed and brutality.

Look up, Hannah! The soul of man has been given wings and at last he is beginning to fly. He is flying into the rainbow—into the light of hope—into the future, that glorious future that belongs to you, to me and to all of us. Look up, Hannah! Look up.



CHARLES CHAPLIN™

© Roy Export Company Establishment 2006

Licensed by ©copyrights Group

20世紀の「喜劇王」は権力を笑い飛ばす。 名もなき人々の命と自由を肯定するために。

Charles Spencer Chaplin (1889 - 1977)

チャールズ・スペンサー・チャップリンはハリウッド映画初期の俳優、脚本家かつ映画監督です。時には、自分の作品のための作曲も行いました。愛称は"チャーリー"といい、「喜劇王」と呼ばれています。代表作は『街の灯』（1931）、『モダン・タイムズ』（1936）、『独裁者』（1940）、『殺人狂時代』（1947）、『ライムライト』（1952）など。

チャップリンはロンドンで生まれました。両親はミュージック・ホールの芸人でしたが、1歳のときに離婚、父は間もなく酒で身を崩して亡くなります。母子家庭ゆえの貧しさから孤児院や貧民院で幼年期を過ごし、また、ミュージック・ホールでパントマイム劇などを演じて、一家の家計を支えました。その後、ある劇団に入り、アメリカに巡業した際、その才能が認められ、1913年に映画界入りしました。

チャップリン芸術といえば一般に「心優しい放浪者」のイメージが連想されますが、彼の初期作品には、意外にも悪意・冷酷・狡猾さなどが顔をのぞかせています。そこに見られるのは、世間からの冷遇や虐待に受身で甘んじるのではなく、敢えて挑戦し、闘おうとする反抗者の姿です。狡猾さは、財産も地位もない人間が身を守るための知恵ともいべき必要最低限の技術に他なりません。それが同じ境遇に置かれた下積みの人々の熱烈な共感と呼んだのでした。

さらに、チャップリンは、より思考を深め、権力へのしたたかな反抗から、やがて、このような権力を生み出す社会のシステムそのものを描くようになります。『モダン・タイムズ』では産業資本主義の非人間性が、『独裁者』ではナチズムの非人間性が、容赦なく描かれています。しかし、今日においては共感を持って見ることのできるこれらの作品は、当時、賞賛を得ると同時に、様々な批判にさらされました。『独裁者』について言えば、その制作にあたっては、ヒトラーを題材にしたことで様々な物議をかもし、反対派からの妨害もあったようです。

また、『モダン・タイムズ』では、主人公が、トラックが落とした赤旗を拾い、そのトラックが戻ってくるよう、旗を振り回す場面がありますが、この場面が、あたかもチャップリンが共産主義者であるかのような嫌疑を抱かせるきっかけとなりました。そして第二次世界大戦終結後、時代は冷戦期に入ります。1952年、家族と共に渡英した彼が再びアメリカの地を踏むのは、アカデミー賞特別賞を手にした1972年、実に20年後のことでした。

1975年には、それまでの活動を評価され、ナイトに叙され「サー・チャールズ」となりました。

その2年後のクリスマスの朝、チャップリンはスイスの自宅で息を引き取りました。

来年、没後30年を迎えます。



参考書籍

- | | | |
|-------|----------------|----------------|
| ○岩崎昶 | 『チャーリー・チャップリン』 | 講談社現代新書、1973年 |
| ○江藤文夫 | 『チャップリン』 | 岩波ジュニア新書、1995年 |